

語学教育センターの設立について

副所長 越坂部 則 道

平成 15 年 12 月 24 日、経済学部カリキュラム委員会の終了後のことでした。当時経済学科長だった森田昌幸先生に「ちょっと話があるから研究室まで来てくれないか？」と声をかけられました。同じ経済学部の先生とはいえ、森田先生に直接話しかけられたのは数年ぶりのことで、まずそのことに驚きました。

研究室に入るなり、「今度、4 月から語学教育センターを作ることになった。私が所長になるので、先生には副所長になって語学教育センターを手伝ってほしい」という趣旨のことをいきなり言われました。それを聞いたとき「えっ、何で私にそんな重大な話を？」と思い、心拍数が急上昇したのを覚えています。

二十三年前本学に赴任したとき、経済学部は「経済学科」、「経営学科」、「一般教育等」と三つの組織にわかれ、森田先生も私も同じ「一般教育等」に所属していました。ただ森田先生は社会系の政治学がご専門、私はフランス語の担当、同じ「一般教育等」でも分野が異なるので、あまり懇意にさせていただいたことはありませんでした。ましてその後先生は専門の経済学科へ異動されて、すっかり疎遠になりました。

また十年ほど前、第二外国語を選択必修科目からはずすといういわゆる「第二外国語問題」が経済学部教授会に吹き荒れ、この問題が解決するまでの二・三年の間は、まるで教授会の被告席に座っているようで、私の人生のなかでもっとも辛い時期でした。第二外国語が大学教育にとってなぜ必要なのか、もし必要だとするならば、それにはどのような根拠があるのか、といった問題を、担当者以外の先生方が教授会のなかで議論するのを聞いていると、まるで針のむしろでした。

大学の教育方針に逆らった、いわゆる反体制的な助教授。おそらくそれが私の大学内での立場だったと思っていました。そんな窓際族を副所長にしようと思っても、常務理事（現在の理事長）の水田先生が認めるわけがない。「わたしは、

あの、フランス語の、おさかべですよ！」と心のなかで叫んだくらいです。

そういった過去二十年間の出来事が次々と脳裏をかすめました。そしてもし本当に語学教育センターができれば、また「第二外国語問題」が持ち上がるかもしれない、また教授会の被告席に座らされるかもしれない、という恐怖心でいっぱいになりました。「針のむしろ」→恐怖心→「被告席」→恐怖心、これらがぐるぐると渦をまいて心拍数を上げた、というのがそのときの偽らざる本心です。

そして結論は、もし語学教育センターができればどのような形であれ「第二外国語問題」が再燃するかもしれない、そのときまた「教授会の被告席」に座るのは絶対に嫌だ、それくらいなら議長席に座って問題を仕切る方がまだ気が楽だ、ということでした。

「分かりました。語学教育センターを手伝いましょう」と森田先生に返事をするまで、自分では相当長い逡巡があったつもりでしたが、後で聞くと、ほとんど即答に近かったようです。

そうなんです、語学教育センター副所長なんて立派な肩書きがついていますが、出発点は「第二外国語問題で針のむしろに再び座らされたくない」という実に利己的な、狭小的な判断からでした。

その後田中学長や水田常務理事（現理事長）から直接語学教育センターの設立理由などをお伺いして、このセンターがもっと大きな教育理念に基づいていること、大学教育全体にかかわることで、第一外国語とか第二外国語とか、そのような偏狭な考え方は別次元の外国語教育をめざしていることを知りました。だいたい、恐れていた「教授会の被告席」にしたところで、経済学部を離れたことにより、私にとって教授会そのものが「ぶっ飛んで」しまいました。

今となっては、あの判断は笑い話にしかならないかもしれません。ただ、あのような恐怖心を抱いたことは忘れてはならないと思います。少なくとも、恐かった時期が私のなかにあったことを忘れるならば、私の置かれた立場を忘れることに等しいと思っています。そういうのを“原点”と言うのかな、と何の根拠もなく思う今日この頃です。